

論文の要旨

論文題目 Can-do statements を用いた自己評価における質問項目要因と個人差要因の影響
—韓国・中国 JFL 学習者の「聞く」技能を対象として—

氏名 入江 友理

学位 博士（文学）

授与年月日 平成26年3月25日

本研究の目的は、Can-do statements を用いた自己評価に関して、質問項目要因と個人差要因という2つの要因についてその影響を明らかにすることである。

近年、日本語教育において、Can-do statements を用いた自己評価が注目されている。しかし、その作成方法はまだ明確にはまとめられておらず、教師や研究者などはさまざまな疑問を持ちながら経験的に作成しているのが現状である。

Can-do statements を用いた自己評価はさまざまな利点があるものの、条件や諸要因によりばらつきや過大評価、過小評価があることが知られており、研究者によって調査分析が進められている。自己評価にばらつきをもたらす要因としては、個人差要因、タスク要因、質問項目要因が挙げられるが、この中で、質問項目要因、つまり質問項目の記述に関わる問題についてはあまり研究が進んでいない。また、自己評価に影響する母語や学習環境、言語使用経験などの個人差要因についてはすでに研究がされているが、それを質問項目要因と絡めて分析した研究はほとんどないと言ってよい。そこで、本研究では、Can-do statements を用いた自己評価について、質問項目の記述がどのような影響を及ぼすのか、またそれは学習者の性別、母語、言語使用経験によって異なるのか、という点を検討し、そこから Can-do statements 作成の指標となるポイントを明らかにすべく、調査・分析を行う。

調査は、Can-do statements 調査、聴解問題、アンケートの3段階に分けて行った。Can-do statements は先行研究で用いられてきたものを分類し、6つのカテゴリーの〔基本の行動〕（「ニュース」「ドラマ」「映画」「会話」「指示・説明」「討論・発表」）を抽出した。そこに、先行研究から抽出した要素を5つ（【程度】【具体例】【身近さ】【補助の有無】【配慮の有無】）に加え、計66項目の Can-do statements を作成した。聴解問題は旧日本語能力試験の問題から識別力の高い問題項目20問を使用した。アンケートでは、日本語使用経験等について回答を求めた。

学習者の調査対象者は韓国、中国の大学で日本語を学ぶ JFL 環境の学習者とし、韓国では 4 大学、中国では 3 大学で調査を行った。データのスクリーニングを行い、有効回答者数は合計 378 名（韓国人回答者 184 名、中国人回答者 194 名）であった。

各調査の基本統計量についてまとめた結果、まず、本研究の調査で用いた 66 項目の Can-do statements には高い信頼性があることが認められた。聴解問題については、項目分析の結果、本研究の調査対象とした回答者の能力を十分識別できていない問題が 3 問あったため、その問題は削除し、17 点満点の問題とすることとした。この聴解問題にも十分な信頼性が得られ、幅広い能力の学習者が回答者になっていたことから、Can-do statements、聴解問題ともに適切であったことが確認された。また、聴解問題の得点と Can-do statements の合計点との間には比較的高い相関があったことから、今回使用した 66 項目の Can-do statements は自己評価項目としての妥当性が認められたといえる。

質問項目要因に関しては、まず、「何項目あれば信頼性、妥当性が確保されるか」という研究課題について検討した。Can-do statements 66 項目のうち各カテゴリーの〔基本の行動〕の Can-do statements 6 項目について信頼性係数を求めたところ十分な値が得られた。また、その 6 項目と聴解得点との相関を見たところ、Can-do statements 全項目（66 項目）との相関とそれほど変わらない、十分な値が得られたことから、「聞く」技能に関しては、本研究で用いた〔基本の行動〕6 項目でも信頼性、妥当性が確保されるということがわかった。

次に、「要素の数により聴解得点との相関は変化するか」という研究課題について検討した。〔基本の行動〕のみの項目と、要素を 1 つ加えた項目、要素を 2 つ加えた項目について、聴解得点との相関を求めたところ、それぞれの差は非常に小さかったことから、要素を加えていって言語行動を詳細に記述しても、聴解得点との相関はそれほど高くなるわけではないということが明らかになった。

さらに、項目ひとつひとつについて、記述の違いにより〔基本の記述〕より平均値や相関が高くなったり低くなったりする項目にはどのようなものがあるか、という観点から分析を行った。その結果、視覚的な補助があること（「日本語の字幕があれば」「事件の映像があれば」など）や話し手の配慮があること（「ゆっくりはっきり話してくれれば」など）、自分にとって話題や内容が身近であること（「自分がよく知っている」「関心がある話題についての」など）を明記したものでは自己評価の平均値が高くなっていた。反対に、自分にとって身近でないこと（「あまりなじみのない」など）や難しい内容（「日本の政治・社会に関する」など）が書かれている場合には自己評価が低くなっていた。また、相関係数に影響する記述もさまざま見られた。例えば、字幕に関して、「日本語の字幕があれば」という記述が入ると聴解得点との相関は低くなり、反対に「字幕がなくても」という記述が

入ると相関は高くなっていた。また、「あまりなじみのない」という記述が入ると床効果が現れ、「自分がよく知っている」という記述が入ると天井効果が表れるなど、【身近さ】の要素は自己評価と聴解得点との相関にさまざまな影響を及ぼしていた。

個人差要因に関しては、まず、回答者の性別、国により自己評価にどのような傾向がみられるか検討した。その結果、聴解問題では中国人回答者より韓国人回答者のほうが得点が有意に高かったにもかかわらず、両者の間で Can-do statements の合計点には差が見られなかったことから、中国人回答者が自分の聴解能力について過大評価をしている可能性が示唆された。これについてさらに性別を分け散布図を見た結果、中国人女性回答者の低得点層に過大評価をしているものが見られた。つまり、中国人女性の過大評価により、中国人回答者全体として、韓国人回答者よりも高く自己評価をしているという結果であった。

実際の生活の中で日本語で聞いたり話したりしたことがあるかどうかという言語使用経験については、アンケートの結果から各カテゴリーの「経験あり群」と「経験なし群」を分け、自己評価の違いを分析した。その結果、すべてのカテゴリーについて経験なし群より経験あり群のほうが聴解得点、自己評価ともに有意に高かった。また、聴解得点と自己評価の相関も経験あり群のほうが概ね高かったが、2群間の相関の差が有意だったのは「ニュース」と「討論・発表」のカテゴリーのみであった。「ドラマ」「映画」「会話」などに比べると、「ニュース」「討論・発表」は形式性の高い独話であり、経験がなければ自分ができるかどうかを正確に自己評価するのは難しいため、経験なし群で聴解得点と自己評価の相関が低くなり、経験あり群の相関との差が有意になったと考えられる。

以上、質問項目要因と個人差要因の個別の分析には主に相関分析を用いた。次に、これら2つの要因の相互の影響を見るため、DIF 分析を行った。

DIF 分析では、性別、国、経験差によりそれぞれ2群に分け、回答傾向の異なる Can-do statements がないか検討した。まず性別では、いくつかの項目に DIF が見られたが、特徴がはっきりしなかったことから、今回の分析結果からは男女で回答傾向に差が見られるような記述は見つからなかった。次に、韓国人回答者と中国人回答者の2群に分け、DIF 分析を行った。その結果、約3分の1の項目に DIF が検出され、それらの項目はすべて中国人回答者に有利な項目であった。その中で特徴的だったのは「字幕があれば」「自分がよく知っている話題」「ゆっくりははっきり話してくれれば」などの記述であった。中国人回答者はこれらの記述に過剰に反応して「易しい」と判断し、高く自己評価していることが DIF として現れたのではないかと考えられる。一方、DIF が検出されなかった項目としては、〔基本の行動〕のものが多く見られた。より単純な記述のほうが、2群間で回答に差が出にくいと考えられる。しかし、単純な記述ばかりでは学習者から得られる情報が少ないため、記述を加えるとしたらどのようなものを加えれば回答傾向に差が出にくいかを見るため、

他の項目についても検討したところ、「あまりなじみのない」「字幕がなくても」「日本の政治・社会に関する」などの記述が DIF の出なかった項目に目立った。こうした点に注意して項目を作成すれば、2 群間で同等に使用できる Can-do statements になると考えられる。

最後に、Can-do statements のそれぞれのカテゴリーについて、アンケートの結果から経験の有無により 2 群に分け、DIF 分析を行った。ほとんどの項目で DIF が検出されたことから、経験差があると自己評価の回答傾向も異なってくることが示唆された。また、能力が高いほど経験の有無により自己評価の差が開くという、先行研究を支持する結果が得られた。DIF が検出されなかった項目もいくつか見られ、「ドラマ」「映画」のカテゴリーでは「あまりなじみのない」「字幕がなくても」などの記述が特徴的であった。これらの記述は韓国人回答者と中国人回答者の間でも DIF が出にくい記述として見られたことから、学習者の国籍、経験差によって回答傾向に差が出ない項目を作成するには必須の記述であると言える。

以上、Can-do statements 作成の際に注意すべき点などを明らかにするために、質問項目要因と個人差要因という観点から調査、分析を行った。これらの結果は日本語教育のさまざまな場面で利用できるものであろう。例えば、ドラマや映画などの Can-do statements では「字幕がなくても」という記述を入れることによって、聴解能力との相関が高くなっていったことから、より正確に学習者が自分の能力を自己評価できるような Can-do statements を作成するためには、「字幕がなくても」という記述は必要不可欠なものであると言える。

また、大学などで、海外協定校から学習者を受け入れる際などに、自己評価により簡単なレベルチェックを行うことが考えられるが、それにはどの国でも同等に学習者が自己評価できるような Can-do statements を作成することが重要である。本研究により、韓国、中国の学習者に用いる Can-do statements を作成するうえでの注意点が明確になった。今後は、他の国についても本研究で行ったような調査や分析をさらに進め、差が出やすい記述の特徴、差が出にくい記述の特徴を明らかにしておく必要がある。

これまで、Can-do statements は研究者によって経験的に作られ、本研究のような実証的な研究がされてこなかった。そのため、本研究は今後の Can-do statements 調査にとって有意義なものであると言えるだろう。